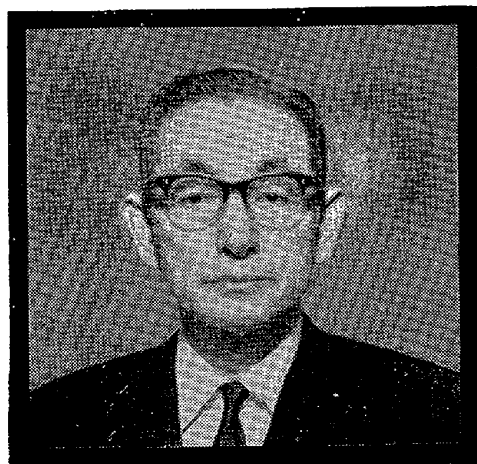


追悼 前会長、名誉会員 湯川 正 夫 君

本会前会長、名誉会員湯川正夫君は、昭和44年10月5日午前4時20分、肺ガンのため東京都杉並区・東京衛生病院にて逝去されました。

ここに同君の冥福を祈り、つつしんで哀悼の意を表します。



経 歴

故人は六高、東京帝大工学部冶金学科を卒業後、大正15年八幡製鉄所に入社して以来技術畑を歴任後、昭和25年八幡製鉄発足とともに常務取締役・本社技術部長に就任、28年八幡製鉄所技師長、33年同副所長、37年代表取締役副社長に就任しました。この間、八幡製鉄における鉄鋼技術の開発、戸畑、堺、君津など新鋭製鉄所の建設に、技術陣の最高指導者として大きな役割を果たしてきました。海外においても、ブラジルに赴きウジミナス製鉄所の建設に偉大な業績を残しています。昭和39年4月～41年3月日本鉄鋼協会会長をはじめ数多くの公職にも携わり、英国、ラテンアメリカ、ドイツなどの各鉄鋼協会

の名誉会員にも推挙され、世界にも広くミスター・ユカワの名を知られています。折柄、国際鉄鋼協会(IISI)第3回総会に出席するため来日中の各国鉄鋼首脳からも、その死が深く悼まれました。

故人は数々の功績により、輸出貢献に対する総理大臣表彰、藍綬褒賞、大河内記念賞、日本鉄鋼協会製鉄功労賞、同渡辺義介賞などを受賞しました。

これからの鉄鋼技術開発の焦点として原子力製鉄の開発が注目されている折柄、昨年7月日本鉄鋼協会に創設された原子力部会部会長としての活躍が期待されていました。

追 悼 の 辞

日本鉄鋼協会前会長 名誉会員 三 島 徳 七

日本鉄鋼協会名誉会員、前会長湯川正夫君。きょう、私が日本鉄鋼協会の代表として、あなたのみたまの前に立ちお別れの言葉を述べようとは思ってもよらぬ出来事です。

去る10月5日のお昼ちよつと前、日刊工業新聞から拙宅へ電話があつて、私は初めてあなたのご逝去を知り、

びつくりした次第であります。その際、新聞社から一言でよいから私の感想を聞いて記事に載せたいとせがまれたので、私は咄嗟にこう答えました。「わが国鉄鋼業界の技術面をささえてきたかけがえのない人を亡くしてしまつた。まことに残念である。」

湯川君、君は大正15年東京帝国大学工学部冶金学科を

優秀な成績で卒業すると、期するところあつて当時商工省の所管にあつた官営八幡製鉄所に入り、特殊鋼部珪素鋼板係勤務という辞令をもらつて鉄鋼業への第一歩を踏みだされたのであります。爾来40余年の長きにわたり、八幡製鉄の技術畑一筋に歩みつづけ、八幡製鉄の発展とともに鉄鋼技術のすみずみまで知りつくされたのである。この間、戦前、戦中、戦後にわたつて起つた日本鉄鋼業の盛衰と未曾有の激動を経て最近の技術革新に伴う驚異的發展にいたる全過程をことごとく身をもつて味わひ、その上にあなたの優れた頭脳と人一倍の勤勉努力による研究を加えて一枚一枚を積み重ねてつくりあげた鉄鋼技術の蓄積は、何人も及ばぬものでありました。

湯川君、後年あなたがわが国鉄鋼業界の技術畑における第一人者として各方面からの信望をあつめられた所以は実にここに基因するもので、君の歩まれたコースは他人が望んでも容易に得られるものでなかつた。そういう意味では、君は幸せな生き方をした人だと思う。君が八幡製鉄の技術部長、技師長、建設本部長などの要職を経て最後に技術の総師として副社長の座にのぼり、最近に至るまでの長い期間に立案計画から建設、竣工を経て操業に至るまでを統率処理して、立派な成果をおさめたものは数えきれぬほどであり、そのいずれもが八幡製鉄に繁栄をもたらし、ひいては日本鉄鋼業の進展に偉大な貢献をしたと申しても決して過言ではありませんまい。なかんづく君が全力を投入して企画完成した戸畑製鉄所は、わが国が世界に誇る大型臨海製鉄所の第1号で、当時先進国の専門家の驚異と賞讃の的でありました。さらに、君が研究を指導開発して得た特許やノーハウで海外に輸出され、国際的にその真価を認められたものもまた少なくありません。

また、君は業界のリーダーとして活躍されただけでなく、さらに鉄鋼業に関連ある学協会の事業にも参加協力して多大の成果をあげられたことは周知の事実である。

私の最も深い関係を持つ日本鉄鋼協会に対しては、昭和29年評議員に推薦されて以来、九州支部長として、さらに本部理事に選出されて協会の発展に多大の貢献をされました。ことに5年前、即ち昭和39年4月から2カ年間、私の後を継いで会長に就任され、私どもが立案成立させた協会の拡大強化計画を継続推進して立派に軌道に乗せて下さつたことは、協会史上に残る大事業であります。

また訪英鉄鋼視察団の団長として15名の団員を伴つてイギリスに渡り、両国間の親善を深めるとともに、相互の技術交流を盛んにする糸口をつくられた功績もまた誠に大なるものでありました。日本鉄鋼協会はこの前後から急速に国際的地位が高まり、他方日本鉄鋼業の驚異的發展と相俟つて、世界の学協会から高い評価と信頼を受けるに至つたのであります。

かくて君の名声はわが国内で次第に高まると同時に、先進諸国の鉄鋼業界においてもその名を知られ、英国、西独およびラテンアメリカの鉄鋼協会より名誉会員に推挙されるなど、斯界における国際人としてその将来を嘱目されるに至りました。

君はまた、わが国鉄鋼業の将来に対して大きな抱負と理想を持ち、その実現に最善の努力をされる心構えであつたことは私のよく承知するところであります。また、日本鉄鋼協会に対しても、来年9月東京において開られる世界で最初の鉄鋼科学技術会議の組織委員長としての重大な役割や、昨年度発足した原子力部会の部会長としてコースを使わぬ原子力製鉄法など長期にわたる計画を立て、大いに活躍される準備をされていたことなども、おそらく亡くなる直前まで君の脳裏を去らなかつたことと思われまふ。

このような事情から私どもとしては、君がますますご健勝で、今後少なくとも10年ないし15年は君の卓越した知能と豊富な経験をフルに生かして、思う存分の活躍をしてもらおうと期待しておつたのですが、不幸病魔のおかすところとなり、今やその望みは忽然として消え失せてしまつた。かすがえすも残念でなりません。

私は君の亡きあと、同僚や関係深い人々および君の指導薫陶を受けた有能な後輩などが、相携えて君の遺業を受けつぎ、君の希望を実現させるよう最善の努力を惜しまないであらうことを信じて疑いません。乞いねがわくば、湯川君もこれを信じて心安らかに眠りたまえ。

以上、はなはだ不十分ながら思いいづるがままに君の残された偉大な功績と高潔なお人柄を讃え、日本鉄鋼協会を代表して、衷心より哀悼の意を表するとともにご冥福を祈つて、私のお別れの言葉といたします。

本稿は葬儀当日、日本鉄鋼協会代表として三島徳七前会長、名誉会員が霊前で捧げられた弔辞に、本誌掲載のためみづから加筆されたものであります。